統合移転

２つの契機

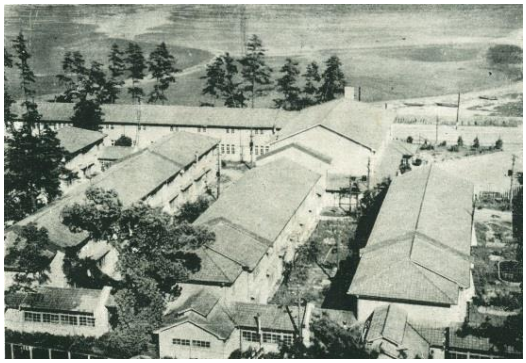
社会が急速に経済成長を遂げる中、本学では昭和３９（1964）年９月の評議会で下関市長府の農学部と、旧山口市街地にある本部、文理学部、経済学部及び教育学部を山口市平川地区に統合移転する方向を決めた。この決定に至る契機は2つあると考えられる。

１．農学部の移転計画

農学部は山口・宇部地区から離れているため教育や運営に不便であり、各施設が分散している上、進駐軍の施設の使い回しで建物が老朽化していること、振動・騒音が激しく、農場は地質・土性が極めて悪いこと等の理由から、昭和２７年の教授会において他の適地への移転の意向を打ち出し、移転調査委員会を設置した。

移転先として、①防府地区（教育学部防府分校跡及び民有地）、②山口地区（平川、大内各方面、県営グラウンド）、③宇部地区の3か所が候補に挙がり、数年かけて調査が行われた。その結果、山口市平川地区が大学本部に近く、教育・研究上有利であること、地域農業の研究・開発上最も適した立地であるとの結論を得た。また、地元平川の農業委員会・平川振興会が誘致を積極的に応援し、山口市議会でも「学都山口」建設を目標に誘致運動を展開した。昭和３７年６月の評議会において平川地区を第一候補地とすることを大学として決定し、翌３８年には文部省の了解を得た。

県内では、山口国体開催に向けて急ピッチで整備が進んだ時期でもあった。



農学部校舎（下関市長府）

統合移転前の吉田地区

２．文部省の示唆

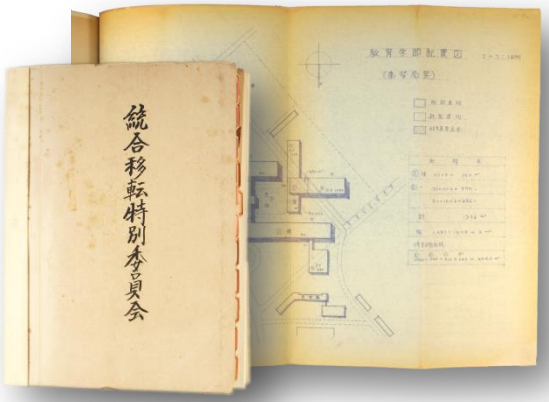
昭和３９年に入り、文部省からは農学部の移転だけでなく、旧山口市街地にある文理学部、教育学部、経済学部も狭くて将来性がないので全学的な検討を要するとの意見が示された。これを受けて本学では、総合大学としての整備・発展を見据え、農学部移転計画から在山学部全部の統合移転へと計画を一気に拡大した。

この背景には文部省の進めていた施設統合・移転計画があり、特に第一次ベビーブームの世代が１８歳を迎える昭和４２年頃までには学生数の増加を可能とするための整備が急務だったことが上げられる。

移転用地の確保

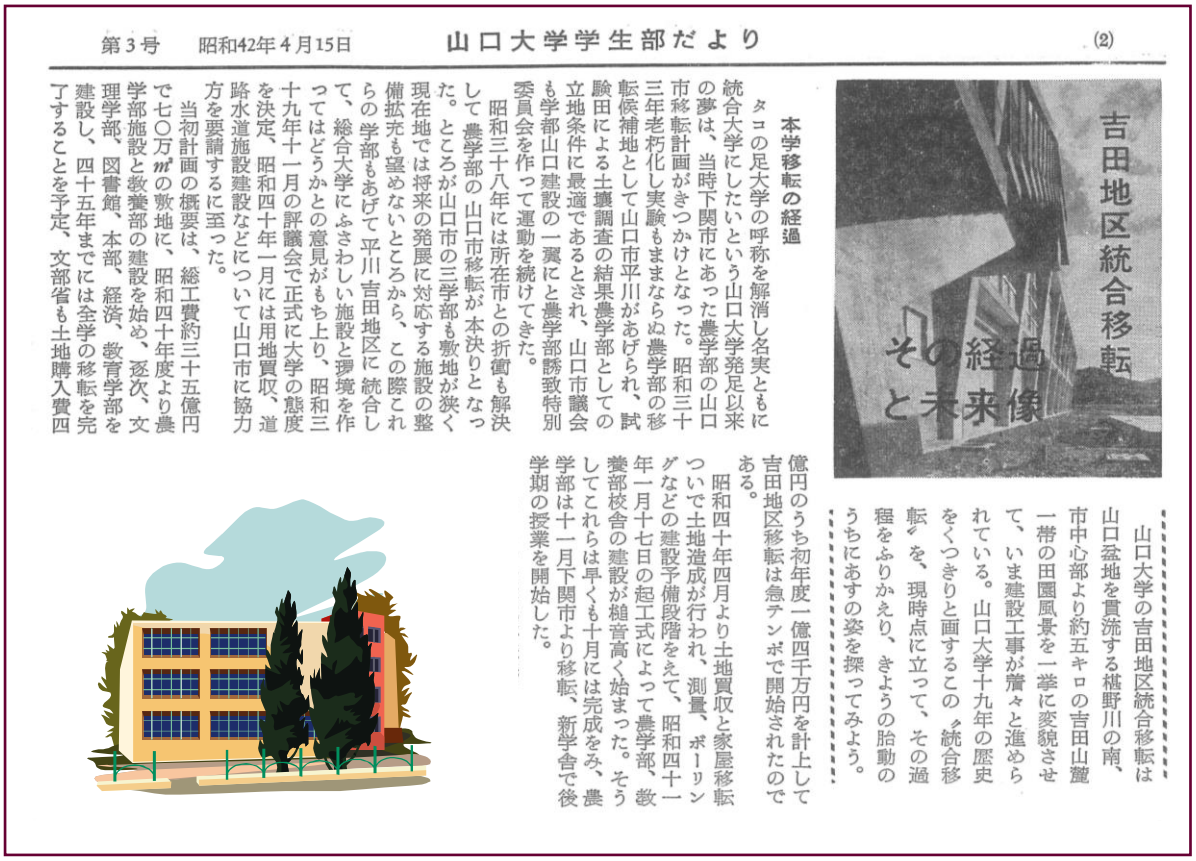
昭和40（1965）年1月、統合移転に向けて用地買収と造成工事が本格的に始まった。移転先の広さは約70万㎡で、旧山口市街地にある本部地区の4．5倍にあたる。この土地購入に約4億円必要だったが、文部省から初年度配分された予算は1億4千万円だったため、本学は年次計画で支障が生ずることを危惧し、山口市に土地の一括購入を依頼した。

山口市は協力を惜しまず、同年2月、市議会に山大統合移転対策特別委員会を設置し、3月に財団法人山口市開発公社を設置し、4月から事業に着手した。並行して平川地区でも対策協議会を結成し、統合移転の推進に協力した。土地所有者と買収価格で折り合いがつかず難航した時期もあったが、地元住民との懇談会で理解を得て、用地買収は昭和41年4月に終了した。当初の3年計画が、開発公社・地区住民の努力と協力により、最速の約1年で鍬入れに漕ぎつけたのである。



統合移転関係の書類綴

大学周辺道路（昭和41年頃）



第3号　昭和42年4月15日　山口大学学生部だより　(2)

吉田地区統合移転

その経過と未来像

山口大学の吉田地区統合移転は山口盆地を貫流する椹野川の南、市中心部より約五キロの吉田山麓一帯の田園風景を一挙に変貌させて、いま建設工事が旺々と進められている。山口大学十九年の歴史をくつきりと画するこの〝統合移転〟を、現時点に立って、その過程をふりかえり、きようの胎動のうちにあすの姿を探ってみよう。

本学移転の経過

タコの足大学の呼称を解消し名実ともに統合大学にしたいという山口大学発足以来の夢は、当時下関市にあった農学部の山口市移転計画がきつかけとなつた。昭和三十三年老朽化し実験もままならぬ農学部の移転候補地として山口市平川があげられ、試験田による土壌調査の結果農学部としての立地条件に最適であるとされ、山口市議会も学部山口建設の一翼にと農学部誘致特別委員会を作って運動を続けてきた。

昭和三十八年には所在市との折衝も解決して農学部の山口市移転が本決りとなつた。ところが山口市の三学部も敷地が狭く現在地では将来の発展に対応する施設の整備拡充も望めないところから、この際これらの学部もあげて平川吉田地区に統合して、総合大学にふさわしい施設と環境を作ってはどうかとの意見がもち上り、昭和三十九年十一月の評議会で正式に大学の態度を決定、昭和四十年一月には用地買収、道路水道施設建設などについて山口市に協力方を要請するに至つた。

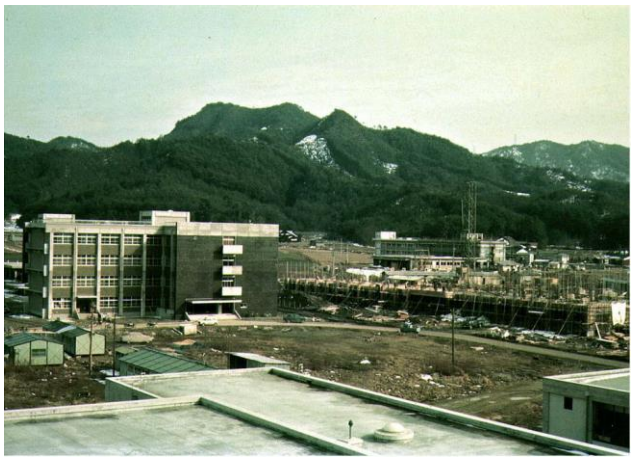
当初計画の概要は、総工費約三十五億円で七〇万㎡の敷地に、昭和四十年度より農学部施設と教養部の建設を始め、逐次、文理学部、図書館、本部、経済、教育学部を建設し、四十五年までには全学の移転を完了することを予定、文部省も土地購入費四億円のうち初年度一億四千万円を計上して吉田地区移転は急テンポで開始されたのである。

昭和四十年四月より土地買収と家屋移転ついで土地造成が行われ、測量、ボーリングなどの建設予備段階をえて、昭和四十一年一月十七日の起工式によつて農学部、教養部校舎の建設が槌音高く始まった。そうしてこれらは早くも十月には完成をみ、農学部は十一月下関市より移転、新学舎で後学期の授業を開始した。

統合移転の進展

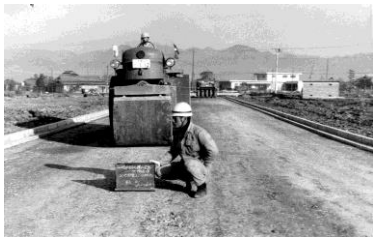
昭和41（1966）年1月17日、農学部・教養部建設用地の地鎮祭と、学長による鍬入れにより移転工事が開始した。5ヵ年計画で事業費総額は28億円が見込まれていた。しかし、予算の関係や学園紛争の影響により、実際の建築完成・移転には8年間を要した。

昭和41年10月　農学部移転
昭和42年　2月　農学部附属家畜病院完成
　　3月　教養部移転
昭和43年　5月　湯田ー山大間の新県道完成
　　10月　文理学部移転
　　11月　事務局・学生部移転
昭和45年　3月　附属図書館落成
昭和47年　8月　教育学部移転
昭和48年　1月　経済学部移転
　　11月　統合移転記念式挙行



農学部と建設中の文理学部（昭和42年）

吉田キャンパス（昭和42年頃）
左から体育館、教養部、農学部、手前に椹野寮が建っている。



道路整備

体育館前の道

新築の教養部校舎へ向かう新入生（昭和42年4月）
新体育館で移転後最初の入学式が挙行された。

正門付近（昭和44年）

移転完了

昭和48（1973）年1月、経済学部の引越を最後に統合移転が完了した。江戸時代末期の文久元（1861）年、山口講習堂が亀山に移って以来、学都山口の中心として112年も続いた伝統の学舎に別れを告げ、万感の思いで新キャンパスに移転したのだった。ちなみに経済学部では亀山校舎と統合移転の記録を映画として残した。

新築の経済学部校舎（昭和48年）

統合移転に係る最終的な記録は以下のとおり。

土地面積	705，982㎡	土地購入費	402，492千円
建物延面積	74，095㎡	事業費	3，354，219千円

昭和48年11月18日、統合移転記念式典が第二体育館で挙行された。中村正二郎学長は、土地を提供していただいた地元平川地区百余名の地主の方々、県・市当局、文部省当局に感謝するとともに、統合移転に寄せられた関係各位の好意に報いるためにも大学本来の使命である教育と研究に一層精進する決意を述べた。

統合移転完了を祝して万歳三唱

遺跡の上に立つ吉田キャンパス

新キャンパスは、弥生時代から中世を中心に栄えた吉田遺跡の上に立地している。昭和41年、統合移転に伴う構内造成工事等の際に石器や土器が出土したため、調査団を組織して遺跡の調査・研究を行った。これが現在の埋蔵文化財資料館に継承されている。

第一学食南西の遺跡保存公園

発掘調査は建設予定地の大部分に亘り、その結果、吉田遺跡が縄文時代晩期から弥生・古墳時代はもちろんのこと、古代から近世までの複数の時代にわたる集落の遺跡であることが明らかになった。特に、第一学生食堂の南西側では弥生時代後期から古墳時代にかけての多数の住居跡や遺物がみつかり、吉田の地に一大集落が営まれていたことが判明したため、公園にして遺跡を保存した。

なお、大学所在地の地番は、当初「山口市大字平井」だったが、地元と協議の結果、平安朝以来の伝統である「周防国吉田村」の名を残すこととなり、昭和41年1月1日より「山口市大字吉田1677-1」とした。

統合移転計画時の吉田地区配置図（昭和40年頃）

統合移転完了時の吉田地区配置図（昭和48年）